

“The Reeve’s Tale” における動機づけについて

——類話との比較において——

浜 口 恵 子

I

“The Reeve’s Tale” は、チャーサーが、おなじみの古いフェアリオの類話を、『カンタベリ物語』なるドラマの中にいかに巧みに組み入れたかを示す顕著な例である。

『カンタベリ物語』は、カンタベリへの道中の余興として、巡礼一同が話語りを競い合う話合戦の世界を提供する。

この話合戦の一番打者は巡礼 Knight. 彼はエミリーを巡るパラモンとアーサイトの恋の争奪戦を堂堂と語りあげ、拍手喝采を浴びる。この Knight に “quite” (I, 3127)¹ (対抗) しようとするのが身の程知らずの傲慢な巡礼 Miller. 彼も “a noble tale” (I, 3126) なる Knight の話に “quite” (I, 3127) しようとの意識からか Knight と似たような恋の争奪戦、つまり大工の妻アリスンを巡るニコラスとアブサロンの恋の争奪戦を語るのであるが、もともとの話が卑猥なフェアリオの事、この話は結局 “a noble tale” (I, 3126) ならぬ “cherles tale” (I, 3169) となるが、Miller 流の語り口でこれはこれで満座を爆笑の渦に巻き込み大成功に終る。

ところが、この笑いの渦の中でただ一人腹に据えかねているのが、巡礼 Reeve である。彼は Miller が話を始める前に既に登場している。大工が問男される話をする、と Miller が宣言したとたん、この Reeve は「や

めろ！」と横槍を入れ、二人の巡礼の口喧嘩が始まる。Miller は “Why artow angry with my tale now?” (I, 3157) ととぼけるが、Reeve は宿敵 Miller² の話が自分へのあてつけとなることを既にひがんで予想している。したがって彼の耳には、恋の争奪戦の方は影が薄く、大工が間男され嘲笑の的になった筋の方だけが、強く印象に残ったのだろう。彼は昔大工であった事、また話の中の大工同様自分も年老いていることから、この話の大工を他人事とも思えなかったに違いない。彼は老齢について長い愚痴をこぼし、卑猥な話でこの宿敵 Miller に “quite” (I, 3864) するのを諦めるかにみえる。だが、この長い愚痴に業を煮やした話合戦の審判役の亭主の一喝にこの分別もどこへやら、“I shal hym quite anoon” (I, 3916) と “cherles termes” (I, 3917) で Miller にしたたかに仕返しをしてやろうと闘志を剥き出しにして Reeve の話は始まるのである。

Knight の話から “quite” という語でバトンタッチされてきたこの話合戦、元来、旅の慰みに提案されたものなのだが、この Reeve に来て Miller への仕返しという意図が加わる為、この話合戦は、一層白熱化してくるのである。

チャーサーは、このコンテキストの中に、どんなファブリオの素材を拾い、それをこのコンテキストに相応しく練り直す為になどのような工夫をしたのだろうか。その結果、素材とは違うどのような面白さが出てくるのか、考察してみたい。

II

“The Reeve’s Tale” には多くの類話が現存しているが、中でも最も近いのが十三世紀に書かれたフランスのファブリオ *Del Munier et Des II Clerks* (The Miller and the Two Clerks) である³。これには二つの写本があり、チャーサーは、この両方を兼備した類話を知っていたのではないかと推定されている⁴。この類話と “The Reeve’s Tale” に共通する

モチーフは次のようになる。

二人の学生が粉屋に穀物を挽きに来る。粉屋は、学生達の馬の手綱をはずし、粉を盗む。帰れなくなった学生達は一夜の宿を粉屋に頼む。粉屋、その妻と娘、それに学生二人の夕食。その後各人ベッドに赴く。しばらくして一番目の学生が娘のベッドを訪ねる。次に二番目の学生が、粉屋とその妻の寝ているベッドの脇にある揺籃を自分の方へ移動させる。用足しにベッドを離れた妻は、戻って来て、その揺籃の位置から学生のベッドを粉屋のと勘違いして、そこに入る。夜明け前、娘と楽しんだ一番目の学生が、揺籃移動の為、粉屋のベッドを自分達学生のと間違えてそこに入り、粉屋を相棒の学生と思いついて娘との事をしゃべる。これを聞いた粉屋は怒り、二人の格闘となる。この騒ぎに粉屋の妻もその隣りに寝ていた学生も目を覚まし、入り乱れての喧嘩騒動となり、結局、二人の学生が粉屋をやっつけ、粉も取り戻してひきあげる。

以上のようなモチーフを共有しながらも、“The Reeve’s Tale” とこの類話には異なる点が多い。中でも、特にこの“*The Reeve’s Tale*”にとって重要な類話との相違点は、筋運びの動機が違っている点である。まず、学生達が粉屋の所へ行く動機が、類話では、経済不況の時代にあって食を求めて行く。一方、“*The Reeve’s Tale*”では、盗みを働く粉屋を盗ませない為となっている。粉を盗んだ後、類話では、学生は粉屋が盗んだとは疑わない。“*The Reeve’s Tale*”では、学生は粉屋が盗んだと確信している。一番目の学生が娘のベッドに行く動機は、類話では学生が娘に一目惚れして行く。“*The Reeve’s Tale*”では、粉屋一家の鼾の為不眠の学生が、粉を盗まれ、粉屋に酷い仕打を受けたその腹いせに娘を訪れる⁵。二番目の学生の揺籃移動の動機は、類話では、用足しに行く妻の姿を見て、その気になる。“*The Reeve’s Tale*”の方では、粉屋にしてやられっぱなしの自分の腑甲斐無さを嘲笑されるという危惧からである。しかも類話ではその揺籃を妻が用足しに起き上がったから動かすのに対し、

“The Reeve’s Tale”では妻が起き上がる前に動かしておく。また粉屋が粉を盗んだことを白状してその隠し場所を告げる者は、類話では妻であり、“The Reeve’s Tale”では娘となっている。類話の妻の方は、粉屋に学生と寝ているのを罵倒された腹いせに一切を暴露する。したがって、類話ではもちろん妻も学生の罠に掛かったのに気付くが、“The Reeve’s Tale”では妻は最後まで気付かず、学生と間違えて粉屋に止めの一撃を与えてしまう。また、“The Reeve’s Tale”で粉の一件を白状する娘は、学生との別れのセレナーデに感きわまって無意識のうちに父親を裏切ってしまう。類話にこのセレナーデの場は無い。

このように、チャーサーはフュブリオのおなじみのモチーフを踏襲しながらも、動機づけに微妙な変化を加えている。この工夫が、前項で述べたような『カンタベリー物語』のコンテキストの中で語られる“*The Reeve’s Tale*”に、類話とは別のどんな効果を生みだしているか、“*The Reeve’s Tale*”を具体的に辿って検討してゆくことにする。

III

二人の学生が粉屋へ行くことになった動機づけを、チャーサーは詳細に説明する。ケンブリッジの“*Soler Halle*” (I, 3990) の寮の賄方が病気である。それに乗じて、巡礼 Miller 酷似の粉屋シムキンは、今まで“*curteisly*” (I, 3997) に失敬していた粉や穀物を今度は“*outrageously*” (I, 3998) に盗みを働く。学長の苦情も歯がたたず堂堂としらを切り通す。これに弱り果てた大学側を代表して、粉屋への派遣を要請するのが、二人の学生である。この二人、「粉屋が半ペックでもずるいやり方で盗んだり、力づくで奪ったりしたら、ただではおかんぞ」 (I, 4009) と粉屋への闘志を燃やす。しかも、実は大学救助の為というよりは、遊び好きな学生のすさび事 (“*oonly for hire myrthe and revelrye*” (I, 4005)) として、この粉屋への挑戦を願い出たのである。このような学生の粉屋への対抗意識

は、不況で困窮の為粉屋に穀物を挽いてもらいに行くという設定の類話には、皆無である。これは、巡礼 Miller への対抗意識からこの話を始めた巡礼 Reeve に、彼の話の中の登場人物に巡礼 Miller 酷似の粉屋シムキンを配させ、それに学生を対抗させようと意図させたチャーサーの工夫と思われる。語り手巡礼 Reeve の巡礼 Miller への闘志はこの二人の学生の粉屋シムキンへのそれと重なり合うのである。

話の出だしから、このように学生の粉屋へ赴く動機づけを変えることにより、チャーサーは類話とは別種の感興を狙ったのである。つまり、この話の聴衆は学生の粉屋に対する対抗意識を最初から知らされている為、これから学生側が学長でさえ太刀打できなかった強敵粉屋に対しどう出るか興味をそそられることになる。

“Al hayl, Symond, y-fayth! / Hou fares thy faire doghter and thy wyf?” (I, 4022-23) 開口一番、学生アレンの挨拶は、学生達と粉屋一家が既に顔見知りの間柄であることを示す。粉屋の娘が父親の血を受けて“kamus nose” (I, 3974) に“thikke and wel ygrowen” (I, 3973) の容姿の田舎娘であることを既に周知の聴衆は、この学生の言葉が、血統の良い妻や娘を自慢にしている傲慢な粉屋への策略の一つだと推察する。当の敵、粉屋の方でも学生の魂胆を見透かすように、心許すことなく、“Aleyn, welcome, by my lyf! / And John also, how now, what do ye heer?” (I, 4024-25) といきなり本題に入って用件を聞く。病気の賄方の代りに粉を挽いてもらいに来たと答える学生に対し、“What wol ye doon whil that it is in hande?” (I, 4035) と学生の意図を読み取ってずばり畳み掛けてくる。二人の学生はさらに粉屋の自尊心を擦ろうと、自分達を粉挽きに関しては無知な馬鹿者と卑下して、粉を挽く現場を粉を入れる所と出てくる所の両側で敵重に見張る口実を作る。ジョンが、

‘By God, right by the hopur wil I stande,

And se howgates the corn gas in.
 Yet saugh I nevere, by my fader kyn,
 How that the hopur waggis til and fra. (I, 4036-39)

ととぼければ、アレンもそれに相錠を打って

John, and wiltow swa?
 Thanne wil I be bynethe, by my croun,
 And se how that the mele falles doun
 Into the trough; that sal be my disport.
 For John, y-faith, I may been of youre sort;
 I is as ille a millere as ar ye. (I, 4040-45)

と無邪気さを装う。だが、この“art”を身につけた学生達の言葉を駆使しての懐柔策は、経験を積んだ粉屋の前では失敗に終る。粉屋でなくとも、聴衆でさえ、二人のこれだけの言葉は粉屋に関して無知な者の口から出るはずはないと察しがつき苦笑を禁じ得ない。

聴衆のこの苦笑いに答えるかのように“*This millere smyled of hir nycetee*” (I, 4046) と粉屋は学生の下手な工作に薄笑いを浮べる。

Al this nys doon but for a wyle.
 They wene that no man may hem bigyle
 But by my thrift, yet shal I blere hir ye,
 For al the sleighte in hir philosophye.
 The moore queynte crekes that they make,
 The moore wol I stele whan I take.
 In stide of flour yet wol I yeve hem bren. (I, 4047-4053)

聴衆の予測通り、粉屋は学生が自分に粉を盗ませないように挑戦にやっ
 て来た事を既に見抜いている。しかも学生といってもたかが北方方言丸だ
 し⁶の田舎者、自尊心の強い粉屋が彼らへの対抗意欲を掻きたてられて学
 生との対戦に応じるのも無理はないのである。この粉屋の学生への対抗意

識も類話には無い。

聴衆の面前で学生対粉屋の対戦がここに明確に宣言されたことになり、聴衆はこの両者の対戦の成行を観戦することになる。このあたりからチャーターサーの話は、類話にはなかった両者の対戦、つまり競い合う過程の面白味加わり、いわば、現代の我々がスポーツ観戦に興じるのと同種の楽しさを聴衆に与えながら展開していくことになる。

さて、宣戦を決意した粉屋、今度は自分が策を巡らす番である。彼は、学生達が警戒して粉を見張っているその真最中に、その敵の裏をかいて、学生の盲点、馬を攻めにかかる。彼は“softely” (I, 4058) に時を見計って、“ful pryvely” (I, 4057) に抜け出して、あたりを見廻して“faire and wel” (I, 4062) に馬に近づき手綱をはずす。この時の粉屋の行動は、学生達の下手な言葉の術策に比べると、機敏で慎重、巧みな動きである。この場のスリルと緊迫感、類話の、粉屋が学生と対面する前に既に姿を隠して粉を盗む設定には皆無である。

この後再び敵である学生の所へ戻ってきた粉屋は、勝利を目前にして有頂点である。なにくわぬ顔で鼻歌を口ずさみ、学生達とふざけて上機嫌である。それもそのはず、いくら粉が無事に“faire and weel” (I, 4069) に挽かれたものの、粉屋の方では既に打つべき手は“faire and wel” (I, 4062) に打ってある。このような言葉のアイロニーは、両者が競い合うという設定の皆無である類話には出てこない。

一方、学生達の方は粉挽きの見張りを無事終えて粉を袋に詰めて帰ろうとしたとたん、馬のいないのに気付く。自分達から懇願したこの派遣に学長から借りてきた馬の姿が見えないとなると、学生達の慌てぶりも納得がいく。学生達は粉屋への用心深い対抗意識も忘れて、放たれた馬同様、冷静さからも粉からも放たれて、馬を追って走り去ってしまう。しかもこの場の学生の周章狼狽ぶりは、先程の仕掛をする粉屋の行動を嵐の前の静けさとするれば、まさに嵐の到来の如き有様である。

Allas, Aleyn, for Cristes peyne,
 Lay down thy swerd, and I wil myn alswa.
 I is ful wight, God waat, as is a raa,
 By Goddes herte, he sal nat scape us bathe!
 Why ne had thow pit the capul in the lathe?
 Ilhayl! by God, Alayn, thou is a fonne! (I, 4084-89)

ここで頻繁に出てくる学生の北方方言は⁷、粉屋の計略にはまり当初の敵粉屋との対戦のことをすっかり忘れ、馬に翻弄される田舎出身の学生の野暮ぶりを強調する。

この対戦で学生側を応援している聴衆は、この学生達の北方方言の取り乱した科白に笑いを誘われながらも、かわいそうにという同情の気持と、どじをふんだなぁと思うじれたい気持を免れない。このような気持を代弁するかのように、チャーサーはこの場の学生に“sely” (I, 4090, 4100) というエピセツトを付ける⁸。

この学生の苦戦ぶりを横目で眺める粉屋の優勢は次の粉屋の独白に如実に顕われている。

I trowe the clerkes were aferd.
 Yet kan a millere make a clerkes berd,
 For al his art; now lat hem goon hir weye!
 Lo, wher he gooth! ye, lat the children pleye.
 They gete hym nat so lightly, by my croun. (I, 4095-99)

この対戦で勝利を掴んだ粉屋は、自分の熟練した盗みの腕に大胆不敵にも対抗しようとした学生を小生意気に思う。その挙句が馬に悪戦苦闘している様を見て溜飲を下げる。

一方、学生達の方でも、粉屋に見事にしてやられたと自分達の敗北を認め、さらに、自分達のトリックの甘さを大学の者達、また特に当の対戦相手の粉屋に馬鹿にされるに違いないと意気消沈する。

Oure corn is stoln, men wil us fooles calle,
 Bathe the wardeyn and oure felawes alle,
 And namely the millere, weylaway! (I, 4111-13)

大学側の選手代表としてさっそうとこの粉屋への対戦に臨んだにもかかわらず、期待に反してあっけなく惨敗した自分達の非力さのばつの悪さを噛み締める。

雨に濡れてぐんなりになった獣のように、気力も体力も抜けて“wery and weet” (I, 4107) と疲れ果て汗びっしょりの敗者の姿で戻って来た学生達は、自分達とは対照的に暖炉のそばで悠悠と寛いている粉屋の勝者の姿をまざまざと見せつけられる。

馬を追い掛けていたうちに、すっかり暗くなった為、学生達は自分達の敵に一夜の宿を懇願するという屈辱をなめる。勝利の優越感のクライマックスにいる粉屋は、内心反感を抱き今まで対抗意識を燃やして来た学生達の“art”学問をここぞとばかりに揶揄してみせる。

The millere seyde agayn, ‘If ther be eny,
 Swich as it is, yet shal ye have youre part.
 Myn hous is streit, but ye han lerned art;
 Ye konne by argumentes make a place
 A myle brood of twenty foot of space.
 Lat se now if this place may suffice,
 Or make it rowm with speche, as is youre gise. (I, 4120-26)

この粉屋の辛辣な冗談の通り、これまで二人の学生は言葉という武器で粉屋に対戦してきたが、この作戦はいとも簡単に見破られ、結局、粉屋の巧妙な行動という武器に負けてしまった。この事を痛感した学生側は、その失敗を繰り返さぬよう、言葉による勝負は捨ててしまう。この粉屋の意地悪な質問をサラリと受け流して、サッと銀貨を出して粉屋の承諾を得る。

ここで、学生は既に言葉の虚しい術策から、粉屋と同じように実利的で

行動的な策に切り換えていることがわかる。この場の勝利のクライマックスにいる粉屋の方も、実はこの学生側の作戦切り換えと同時に、しだいにその勝負運は下降し始めるのである。しかも、この「狭い空間」に関する粉屋の冗談は、実はこれから自分の身に降り懸ってくる不幸の原因でもあり、対戦における不利な条件のひとつなのである。既にこの話の類話になじんでいる聴衆は、粉屋の先の運命を予測して、得意満面でこの語を吐く粉屋の様子にある種のアイロニーを感じるに違いない。

IV

さて、この粉屋対学生の対戦、両者の心理的駆け引きに終始したが、結局、粉屋の楽勝で前半戦は終り、粉屋とその家族に学生二人が加わって和やかな夕食、つまり、この学生対粉屋の白熱戦の休憩を挿んで、以後後半戦が新たな展開をみせることになる。

この休戦状態の夕食の間に、粉屋は前半戦の勝利に安心しきって油断してしまう。

This millere hath so wisely bibbed ale
That as an hors he fnorteth in his sleep, (I, 4162-63)

その為に彼は“hors” (I, 4163) の如く鼾をかき前後不覚に眠ってしまい、敵に巻き返しのチャンスを与えることになる。前半戦で粉屋を勝利に導いた“hors” (I, 4062) が後半戦では粉屋を惨敗へと導く鼾の比喩として再び登場し、対戦ならではのサスペンスを漂わす。

学生達は昼間、粉屋のおかげで疲労困憊の上、粉を盗まれた。その上、夜まで粉屋一家の奏でる鼾の三重奏に苦しめられ、昼夜休む暇も与えられない。彼らにとって泣面に蜂である。アレンはとうとう彼らの嘗めた敗北の次のような巻き返しをはかる。

‘Wha herkned evere slyk a ferly thyng?
 Ye, they sal have the flour of il endyng.
 This lange nyght ther tydes me na reste;
 But yet, nafors, al sal be for the beste.
 For, John’, seyde he, ‘als evere moot I thryve,
 If that I may, yon wenche wil I swyve.’ (I, 4173-78)

昼の敗北の上にこの苦しみでは割に合わない。粉屋は学生の大切なもの、粉 (“flour” [I, 4174]) を盗んだ。その仕返しに、今度は粉屋の大切なもの、つまり娘の「春」 (“flour” [I, 4174]) を頂こうと⁹、この不眠の状態を利用して前半戦の敗けの挽回をはかるのである。

粉屋对学生の対戦なる設定のない類話では、学生がこの娘のベッドへ赴く動機もただ娘に惚れこんだ為となっている。第一、粉屋に粉を盗まれているなどとは気付いていないし、疑ってもいないから粉屋への仕返しというモチーフは全く含まれていない。ところがチャーサーは、娘の所へ赴く動機をアレンにはっきりと次のように言わせている。

Oure corn is stoln, sothly, it is na nay,
 And we han had an il fit al this day,
 And syn I sal have neen amendement
 Agayn my los, I will have esement. (I, 4183-86)

まず、穀物が粉屋に盗まれた事は疑いのない事実だと信じている。その上その粉屋に酷い目 (“il fit” [I, 4184]) にあわされた。この二つの損害の埋めあわせ (“amendement” [I, 4185]) として何か見返り (“esement” [I, 4186]) を貰おうと、娘の所へ遊びに行くというのが、その動機である。

ここでもチャーサーは学生が娘の所へ赴く動機づけを、類話の娘への恋という動機から粉屋への仕返しつまり前半戦の敗けの巻き返し作戦としての行動に変更することにより、この話全篇が粉屋对学生の対戦として進行していていることを示す。

“Alayn, avyse, thee! / The millere is a perilous man” (I, 4188-89) というジョンの忠告に, “I counte hym nat a flye” (I, 4192) とアレンは強気で自分の作戦を積極的に実行する。アレンの行動は前半戦での「どじ」ぶりとはうってかわってすばやく巧妙である。粉屋の娘マリんに叫びをあげさせる暇も与えない。この娘マリンは、良い家柄に嫁つがせようと娘の縁談にもったいぶっている粉屋一家の企みに反して、いとも簡単にアレンの手に落ちてしまう。しかも前半戦の巻き返し作戦としてマリンの所にやって来たアレンに対し、マリンの方はロマンチックな愛の感情を抱いてしまう。アレンの冷めた態度と、マリンの感傷的な真摯な態度の食い違いが滑稽感を醸し出す。

アレンは、夜明け近くになって疲れてきたので、宮廷風な別れ¹⁰を演じてみせてマリンをごまかす。

Aleyn wax wery in the dawenyngge,
 For he had swonken al the longe nyght,
 And seyde, ‘Fare weel, Malyne, sweete wight!
 The day is come, I may no lenger byde;
 But everemo, wher so I go or ryde,
 I is thyn awen clerk, swa have I seel!’ (I, 4234-39)

ところがこのアレンの作戦は、当人も予想外の効果を発揮するのである。この田舎娘のマリンはこのアレンの気取った宮廷風別れにすっかり感動して、自分の愛の証^{あかし}として、心ならずも父親を裏切り盗んだ粉の在所を白状してしまう。

‘Now, deere lemman,’ quod she, ‘go, far weel!
 But er thow go, o thyng I wol thee telle:
 Whan that thou wendest homward by the melle,
 Right at the entree of the dore bihynde
 Thou shalt a cake of half a busshel fynde

That was ymaked of thyn owene mele,
 Which that I heelp my sire for to stele.
 And, goode lemman, God thee save and kepe!
 And with that word almost she gan to wepe. (I, 4240-48)

この伝統的な別れのセレナーデの中で、本来なら愛の誓いが来るべき所に、「パンの在所」という非常に現実的な言葉を置くこの“wench” マリンの庶民版 *aube* は、聴衆にバーレスクの面白さを提供する。アレンは娘を“swyve” (I, 4178) することに成功した上、昼間の損失、粉の在所まで知ることになり、後半戦がここでほぼ学生側の優勢に傾いていることがわかる。

一方、ひとり取り残されたジョンは、

‘Allas!’ quod he, ‘this is a wikked jape;
 Now may I seyn that I is but an ape.
 Yet has my felawe somewhat for his harm;
 He has the milleris doghter in his arm.
 He aunted hym, and has his nedes sped,
 And I lye as a draf-sak in my bed;
 And when this jape is tald another day,
 I sal been halde a daf, a cokenay!’ (I, 4201-08)

と、前半戦の惨敗の挽回に娘を抱いている相棒のアレンとひきかえ、敗け戦に泣き寝入りをしている自分の腑甲斐無さが、後で皆の笑い草になるのではないかという不安から、“I wil arise and aunte it, by my fayth! / ‘Unhardy is unseely’, thus men sayth.” (I, 4209-10) と思いきって揺籃作戦に出る。既に検証したように、類話では粉屋の妻の姿態が学生の行動を駆り立てるのに対し、チャーサーはここでも動機づけを変更して、アレンの場合と同様このジョンの行動も妻への気持とは無関係で、前半戦の延長線上にあるようにしている。

また、チャーサーは、粉屋に勝利が転がり込む直前、作戦を開始すべく時を見はからう彼の様子を描写した“softely” (I, 4058) を、今度はジョンが揺籃に近づいて自分のベッドのそばに移動させる時に再び用いて (I, 4211)、この粉屋对学生の対戦、後半戦ではアレン同様ジョンにも勝負運が向いてきたことを暗示する。このような言葉の効果は、もともと類話にはなかったモチーフ、粉屋对学生の対戦をこの話に盛り込んだチャーサーの工夫である。

さらに、この揺籃移動は、既に触れたように、類話では妻が起き上がったからなのに対し、“The Reeve's Tale”の方では妻が起き出す前に動かしておく。“Unhardy is unseely” (I, 4210) とジョンは何か閃くところがあって、揺籃移動の行動に踏み切る。ここに一か八か賭けをしてみるという、いかにも運と技で勝負を競う対戦らしいトリックの面白さが出てくる。この揺籃移動を終えてジョンが自分のベッドに戻ったとたん、妻がまるで機械仕掛けの人形のように突如起き上がる。類話でこのエピソードを知っている聴衆は、この妻のタイムリーな行動に大喜びしたに違いない。

ジョンの作戦通り、思う壺にはまってくる妻の科白が、またアイロニーに富み聴衆の笑いを誘う。自分の夫、粉屋のベッドに来て、

‘Allas!’ quod she, ‘I hadde almoost mysagoon;
I hadde almoost goon to the clerkes bed.
Ey, *benedicite!* thanne hadde I foule ysped.’ (I, 4218-20)

と言って、揺籃のそばのジョンの方へ向きを変えて、“faire and wel” (I, 4226) にジョンの所に滑り込む。案の定ジョンの作戦は大成功。この“faire and wel”も粉屋が馬の手綱をはずした時に用いられ、粉屋の作戦の首尾よき完了を指して使われたのだが (Cf. I, 4062, 4069)、この語がそっくりこの後半戦のジョンの作戦に首尾よくはまる妻の行動に再び用いられて、後半戦ではこの両者の対戦の形勢が粉屋から学生へと逆転しつつ

あることを示す。

この粉屋の妻の「間違い続き」の滑稽さは、娘のマリンの所から戻って来るアレンにそのまま繰り返えされて、聴衆を大爆笑の渦へと巻き込む。

‘By God,’ thoughte he, ‘al wrang I have mysгон.
Myn heed is toty of my swynk to-nyght,
That makes me that I ga nat aright.
I woot wel by the cradel I have mysго;
Heere lith the millere and his wyf also.’ (I, 4252-56)

アレンは“twenty devel wey” (I, 4257) 歩いて、粉屋のベッドに入り、てっきり粉屋を相棒と思って何も知らずに眠っている粉屋を無理矢理叩き起こし、粉屋に聞こえないように“softe”に目の前の粉屋に、マリンとの“noble game” (I, 4263) を自慢する。ここにまたスリルとアイロニーに満ちた滑稽さが出る。

“As I have thries in this shorte nyght / Swyved the milleres doghter bolt upright” (I, 4265-66) のアレンの言葉は、粉屋に致命的な打撃を与える。“Who dorste be so boold to disparage / My doghter, that is come of swich lynage?” (I, 4271-72) という粉屋の科白が示すように、誇り高い粉屋にしてみれば、玉の輿に乗るはずの自分の娘が、今まで自分がずっと侮蔑し続けてきた田舎学生ふぜいに簡単に手込めにされてしまったのが悔しいのである。前半戦で“traitour” (I, 4269) を自負していた粉屋が、学生に向かって“false traitour!” (I, 4269) と叫んでいることから、粉屋自らここで後半戦での自分の敗北を認めたことになる。

この粉屋の自分の敗北の自覚を機に、先程からの、相手の裏をかいての巧妙な駆引試合は、ここで両者とも真正面から向いあつての取組合に発展する。チャーサーは組んずほぐれずのなかなか勝負の定まらない格闘シーンを描いて、類話には無い迫力を出す。しかも、さらにこの勝負は、自分

の上に空中から落ちてきた粉屋に目が覚めた粉屋の妻とジョンが加わって、この格闘はさらに皆入り乱れての大混乱となり大団円を迎える。この迫力溢れる勝負は、粉屋の“pyled skulle” (I, 4306) を学生のナイトキャップと間違えて粉屋に止めの一撃を与える妻のおかげでやっと学生の方に軍配があがり、結局、前半戦で敗けた学生が後半戦で見事に逆転勝ちして終わるのである。

V

以上のことから、チャーサーは“The Reeve’s Tale”の動機づけを類話とは違った風に変えることで、粉屋と学生の対戦という類話にはなかった新境地を切り開いていったといえる。学生と粉屋の両サイドにも対抗意識は明確であり、相手に負けたくないという勝負意識から話の筋は展開していく。前半戦は、学生側の言葉の懐柔策に対し粉屋の行動的な術策が勝つが、後半戦で学生二人が行動的な作戦に出て見事に逆転勝ちするのである。

チャーサーはこの粉屋对学生の対戦に陰湿さを残さぬ配慮も忘れていない。被害者であるはずの娘マリンは、本人自身、アレンとの別れに涙ぐむ程一夜の恋に感動している。粉屋の妻の方も最後まで自分が学生と寝たとは気が付かない。この二人に被害者意識はない。したがって、この対戦でやられたのは対戦当人の粉屋だけなのである。

このように“The Reeve’s Tale”は、粉屋对学生の対戦という類話にはなかった要素をつけ加えられて、聴衆に、現代のスポーツ観戦にも似た面白さを提供してくれる¹¹。

巡礼 Reeve が巡礼 Miller に仕返しをするというコンテキストに、チャーサーは粉屋が酷い目にあう類話を選んで、Reeve に語らせた。さらに、巡礼 Miller に対抗する巡礼 Reeve の意図が、話の中で粉屋に対抗する学生に重なりあうように、類話に粉屋对学生の対戦を演出したのであ

る。それ故、巡礼 Miller にしてやられてその仕返しをはかる巡礼 Reeve のコンテクストと、粉屋に負けてその巻き返しをはかる学生の対戦は、まさに相似形をなしており、学生の勝利はそのまま巡礼 Reeve の仕返しが成功したことを示す。この点で、この話は、チャーサーが『カンタベリ物語』の中にどんな素材を選び、それをさらにそのコンテクストに相応しく工夫していったかを物語る一つの例だといえる。

『カンタベリ物語』は、旅の余興として始められた話合戦の世界であるが、巡礼間の笑いさざめきや葛藤のうちともすれば「遊びの世界」から真剣勝負の世界へ変わりやすい世界でもある。この “The Reeve’s Tale” 中の対戦も最初は遊び半分に始められたのであるが、いつの間にか真剣勝負となる。

地上の人間にとって、この世はいわば真剣勝負の世界である。この真剣勝負の世界は、天の高見からこの世界を見降ろす神の視座、あるいは同等の視座を与えられる傍観者にとってのみ、「遊びの世界」に映るのである。

この “The Reeve’s Tale” の聴衆は、このような高見の見物の位置を与えられ、この話の中の対戦にスポーツ観戦の面白さを味わうのである。ファブリオは、中世の人達にとって数少ない娯楽のひとつで、この世の圧迫から逃避する唯一の清涼剤であったとすれば、この “The Reeve’s Tale”こそは、そのファブリオの要素を最大限にひきだした作品といえる。

注

- 1 F. N. Robinson (ed.), *The Works of Geoffrey Chaucer* (2nd ed.; London: Oxford University Press, 1957). 以下、チャーサーの作品からの引用はすべてこの版による。
- 2 F. Tupper, “The Quarrels of the Canterbury Pilgrims”, *JEGP*, XIV (1915), 265.
- 3 この話は Philippe Menard (ed.), *Fabliaux Francais du Moyen Age*, Tome I (“Textes Litteraires Français”; Geneve: Librairie Droz S. A., 1979); W.

- F. Bryan & G. Dempster, *Sources and Analogues of Chaucer’s Canterbury Tales* (New York: Humanities Press, c1958); L. D. Benson & T. M. Andersson (eds.), *The Literary Context of Chaucer’s Fableaux: Text and Translation* (Indianapolis & Tokyo: The Bobbs-Merrill Company, INC., c1971) の中に集録されている。
- 4 L. D. Benson & T. M. Andersson (eds.), *op. cit.*, p. 100.
 - 5 W. M. Hart も “The Reeve’s Tale: A Comparative Study of Chaucer’s Narrative Art”, *PMLA*, XXIII (1908), 1-44 の中でこの娘と妻に対する動機は battle of wit にあると論じている。
 - 6 チョーサーの作品における北方方言については, F. N. Robinson, *The Works of Geoffrey Chaucer*, p. 688; A. C. & J. E. Spearing (eds.), *The Reeve’s Prologue and Tale with the Cook’s Prologue and the Fragments of his Tale* (“Selected Tales from Chaucer”; Cambridge; Cambridge University Press, 1979), pp. 54-55; Ralph W. V. Elliott, *Chaucer’s English* (“The Language Library”; London; André Deutsch, 1974), pp. 20-21, 390-93. を参照。なお, 滝本二郎, 「The Canterbury Tales における Miller と Reeve の口論—動機と復讐をめぐる—」, 『人文学』(同志社大学人文学会), 88 (1966) は北方方言のこの作品の意味に対する効果について言及するところがある。
 - 7 さしあたってこの引用における北方方言は, 音声の面では “alswa”, “waat”, “raa”, “sal”, “bathe”, “pit” など, 語彙の面では “lathe”, “Ilhayl”, “fonne” “capul” などが挙げられる。また文法的に “I is”, “thou is” などがそうである。
 - 8 “sely” については拙論「チョーサーの『粉屋の話』における人物描写」, *core* (同志社大学英文学会), 8 (1979) を参照されたい。
 - 9 A. C. Spearing, *op. cit.*, p. 41.
 - 10 Kaske は, この別れのセレナーデの場を *aube* のパロディと論じている。*aube* では恋人達が, 夜明けにやってくる見張りにうながされて, いやいや別れをつけなくてはならないが, アレンは疲れたので自ら進んで別れをつける。Cf. R. E. Kaske, “An Aube in the Reeve’s Tale”, *ELH*, XXVI (1959), 295-310.
 - 11 こうしたチョーサーの物語における人物のゲーム意識については, 繁尾久, 『中世英文学点描』(東京: 学際社, 1974), pp. 184-200 にも触れられている。